



2011 年 8月号

滑稽俳句協会会長 八木 健氏 に聞く 34

紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解く 26 (聞き手 高橋素子)

高橋 > 今年は例年よりかなり早い梅雨入りでしたので、やはりいつもより少し早く梅雨明けが宣言されましたね。

そう言えば忘れもしませんが、昨年七月十二日の早朝、記録的な豪雨の土砂崩れにより愚陀佛庵の倒壊が！

あれ以来、松山地方に大雨が降る度に、萬翠荘の裏山が心配です。現在、愚陀佛庵のあった裏山はどうなっているのでしょうか？

会長 > 現在は、整地されてなにもない状態です。

立ち入り禁止なんです、この跡地を見たいという方もいます。城山への登山道の路肩が崩壊し、その直下に愚陀佛庵があったわけです。崩壊した斜面の防災工事が行われています。

高橋 > それをお聞きして安心しました。当時も(愚陀佛庵を含めて)萬翠荘の館長でいらっしゃる会長のご心配やご苦労は、大変なものだったとお察し致します。

気を取り直して本日は、前回に続いて「秋の時令」の部、季語は「夜長」です。「夜長」は俳人に親しみやすい季語の様ですね。会長にも季語「夜長」のイメージを裏切る素敵な滑稽句がぁありますね。

相談をうけて夜長を使ひきる 健

では、紅緑の「滑稽俳句集」の方に参ります。

出るかと妖物を待つ夜長かな 几董

長き夜を月とる猿の思案かな 子規

さまざまに狸化けんとぞ夜長き 碧梧桐

長き夜の油もなめぬ禿かな 塵外

長き夜を鼠嫁入などすらん 紅緑

会長 > 「出るかと…」

の句は、妖怪が出るという噂に、俳人は好奇心の塊ですから、待ち受けるわけですね。しかし、簡単には出てくれません。夜長を待つのですから、期待に溢れている句です。

「長き夜を…」、

猿は知恵の動物で、しかも身軽ですから。かつては猿に敬意を抱いていました。ですから月をとる思案をしているとするのは的外れではないのです。

「さまざまに…」、

長き夜で時間はたっぷりありますから、狸も様々なものに化けることが出来そうと考えたのです。

「長き夜の油…」、

油をなめる。サプリメントみたいに油をなめたのですね。禿は立場上油をなめたりしないですが。

「長き夜を鼠…」、

夜長の風景ですね。天井裏が鼠たちの楽園ですから、嫁入りもあれば夫婦喧嘩もある。様々な気楽に想像し合ったわけですね。

高橋 > 昔の人に劣らぬ、想像力豊かな面白いご解説。「秋の時令」の句はあと少しですので、続けて御説明下さい。季語は、「行楽」「秋の暮」「惜秋」です。

行秋を尾花がさらばさらばかな 一茶
人は何に化けるかもしらじ秋の暮 蕪村
女郎買をやめて此頃秋の暮れ 子規
戸をたたく狸と秋を惜しみけり 蕪村
鼻毛抜いて秋を慰む涙かな 鳴雄

会長 > 「行秋を尾花…」、

尾花は薄のことですね。薄の穂が風に吹かれるとバイバイしているようにも見えますね。

「人は何に…」、
狐や狸だけが化けるのではない。
人間も化けるのだ。それが実は最も怖いのだというわけです。しかし、蕪村は人間
が何に化けるのか知らぬとしています。

「女郎買を…」、
子規は女郎買をしたことがあるらしく、他にも遊女がどうやらという句があります。
小春といふ遊女を買ひぬ春の暮 子規
小格子や遊女と語る春の宵 子規
ただし、どこまで本当か疑わしい。子規は虚勢を張るタイプですから…。

「戸をたたく…」
狸の恩返しの民話は、たくさんありますね。それ位、狸は人間と親しい動物で、今
でも庭に狸が来る家はたくさんあります。餌付けしたりして、客寄せに使う民宿も
ある。蕪村は狸を友人扱いしていますね。

「鼻毛抜いて…」
の句の、「秋を慰む」は、閑で仕方ないから、鼻毛を抜いたりする。痛いから涙が
出るということです。

高橋 > 本当に面白いご解説に大笑いしてしまいますが、昔の人は日常の生活や思いつ
きを何でも滑稽句に詠んだようですね。これで「秋の時令」の部は終わりです。
次は、いよいよ「秋の植物」の部、季語は「一葉」です。
続けてご指導下さいね。
門番の直に掃たる一葉かな 也有
禪の竿を落けり桐一葉 召波

会長 > 「門番の直に…」、
「一葉」は「桐」の葉ですね。
桐一葉日当たりながら落ちにけり 虚子
など、俳句において「桐一葉」は、「桐一葉落ちて天下の秋を知る」という、中国の
詩に由来する特別の季語です。その特別な季語の桐一葉を、無造作に掃いたと
いうところに、おかしみがありますね。

「禪の竿を…」は、
桐一葉がよりによって禪を干してある竿に落ちたとは…、ということです。禪という
下世話なものと組み合わせて、可笑しい句にしていますね。

高橋 > 次に参りますね。季語は「朝顔」ですよ。「葬(あさがお)」とも書いた様ですね。
朝顔に夜も寝ぬ嘘や番太郎 太祇
葬の世にさえ紺の浅黄のと 也有
夏書せし筆をあさがほ日記かな 大江丸

会長 > 朝顔に夜も…」は、
「朝顔」は「植物の朝顔」と「朝の人の顔」を言いますが、この句は「人の顔」です
ね。番太郎は、見張り番をする役のことですが、存分に睡眠をとった顔をしていな
がら、「夜も昼も寝なかった」と「嘘」をついて、というわけですね。

「葬の世に…」、
花の色の鮮やかさを讃えています。紺は紫がかった藍色ですね。浅黄は浅葱色
で、やはり紺色の仲間でちょっと淡い色ですね。この句は、あさがおの紺色の濃淡
がこの世を彩っていますということです。

「夏書せし筆…」、
「夏書」は九十日間、写経をする行で、人によっては退屈で辛い。作者は夏書をし
た筆で朝顔日記を書いた。まあ楽しい気分転換ということでしょう。

高橋 > 次の季語は「葡萄」です。先日、私の友人が、郷里の同窓会のお誘いに、和紙に
描いた葡萄の絵を送ってくれました。前号の特別企画の、「角川春樹氏に聞く」の
「魂の一行詩」ではありませんが、絵に添えて、『一娛一笑(一期一会) 出会い
は宝 一粒二粒 しっかりつないで』などと書いた「魂の数行詩」もありまして、同窓
会には五十年ぶりに出席しました。あらっ！季語の「葡萄」のお話から脱線しまし
たね。「紅緑の滑稽俳句集」に戻ります。
葉がくれにぬす人猫や葡萄棚 太祇
甘そうに重そうに棚の葡萄哉 菊幹

会長 > 素敵な詩で、同窓会にも出られて良かったです。

「葉がくれに…」の方は、

「ぬす人猫」は、野良猫ですね。捨てられたりして野良猫になる。人家に忍び込んで食べ物を盗む。その猫が葡萄棚の葉がくれにいる、という風景です。

「甘そうに…」の句の、

「甘そうに」は、作者の主観的な受け止めです。「重そうに」は、房が垂れている情景を見て葡萄を擬人化しています。作者の主観と擬人化した葡萄の情景、それを並べて書いたところが可笑しい。

高橋 > 成る程！そうですね。次の季語は、「破芭蕉」と「萩」です。「萩」といえば、会長の滑稽句の中に、私の大好きな秀句の一つがあるんです。

みだれ萩抱き起こすときこぼれ萩 健

「紅緑の滑稽俳句集」の方に参ります。

破芭蕉やぶれぬ時もばせを哉 鬼貫

喰はうかと牛は見てゐる萩の花 柳居

さく萩とちる萩と日をおなじうす 大江丸

会長 > 「みだれ萩…」の句は、

自分で言うのもなんですが、何となく「艶」のある句です。ではここで、一句。

やはらかく抱いてこぼさず乱れ萩 健

「破芭蕉…」

破芭蕉は、その大袈裟な葉の傷み方が愛でられるのですが、破芭蕉になる以前も立派なんです…と。

「喰はうかと…」は、

俳人の目と牛の目の違いです、牛は食べることを考え、俳人は句に読むことを考えますから、そこが可笑しい。

「さく萩と…」

萩は次々咲きついで、花の時期も長いですから、そういうことになりますね。

それを俳句にしたのは、そのことに気付いたからですね。

高橋 > 次の季語は「菊」です。お願い致します。
きくおなじからず然につくる人 大江丸

会長 > 「然に」は、「しかりに」と読みます。自然のままに、あれこれ手を加えない、自然農法ということです。ところが、自然に任せると、同じようには咲かない。大きい小さいの、色も様々に少しずつ異なるということでしょう。

高橋 > ご解説、有難うございました。残念ながら、お時間となってしまいました。最後に、前号の特集で、会長が角川春樹氏にインタビューされた、「魂の一行詩」のお話をもとに、今日の季語をお使いになって、「魂の一行詩」をお作り戴ければ幸いです。

会長 > なるほど、承知致しました。
尻の火が熱くはないか恋蛸
先端の尻とも見えて房葡萄
人魂の軌跡墓苑の一行詩